

第3問

次の文章は『源氏物語』（夕霧の巻）の一節である。三条殿（通称「雲居雁」）の夫である大将殿（通称「夕霧」）は、妻子を愛する実直な人物で知られていたが、別の女性（通称「落葉宮」）に心奪われ、その女性の意に反して、深い仲となってしまう。以下は、これまでにない夫の振る舞いに衝撃を受けた三条殿が、子どもたちのうち、姫君たちと幼い弟妹たちを連れて、実家へ帰る場面から始まる。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

三条殿、「限りaなめり」と、『さしもやは』とこそ、かつは頼みつれ、『まめ人の心変はるは名残なくなむ』と聞きしは、まことなりけり」と、世を試みつる心地して、「アいかさまにしてこのなめげさを見じ」と思しければ、（注1）大殿へ「方違へむ」とて渡り給ひにけるを、女御の里におはするほどなどに対面し給うて、少しもの思ひ晴るどころに思されて、例のやうにも急ぎ渡り給はず。

大将殿も聞き給ひて、「さればよ、いと急にもやし給ふ本性なり。（注3）このおとども、はた、おとなおとなしうのどめたるところさすがになく、いとひききりに、（注4）はなやい給へる人々にて、『めぎまし、見じ、聞かじ』など、ひがひがしきことどもし出で給うつべき」と、驚か**b**れ給うて、（注6）三条殿に渡り給へれば、（注7）君たちも片へはとまり給へれば、姫君たち、さてはいと幼きとをぞ率ておはしにける、見つけて喜び睦れ、あるは上を恋ひ奉りて愁へ泣き給ふを、**X**「心苦し」と思す。

消息たびたび聞こえて、迎へに奉れ給へど、御返りだになし。「かくかたくなしう軽々しの世や」と、ものしうおぼえ給へど、おとどの見聞き給はむところもあれば、暮らしてみづから参り給へり。（注9）寝殿になむおはする」とて、例の渡り給ふ方は、（注10）御達のみさぶらふ。若君たちぞ乳母（注11）に添ひておはしける。

A 「今さらに若々しの御まじらひや。かかる人を、ここかしこに落とし置き給ひて、など寝殿の御まじらひは。ふさはしからぬ御心の筋とは年ごろ見知りたれど、さるべきにや、昔より心に離れがたう思ひ聞こえて、今はかくくだくだしき人の数々あはれなるを、『かたみに見棄つべきにやは』と頼み聞こえける。はかなき一ふしに、かうはもてなし給ふべくや」と、いみじうあはめ恨み申し給へば、

B 「何じこも、『今は』と見飽き給ひにける身なれば、今、はた、直るべきにもあらぬを、『何かは』とて。あやしき人々は、思し棄てずは嬉しうこそはあらめ」

と聞こえ給へり。

C 「なだらかの御答へや。言ひもていけば、誰が名か惜しき」

とて、強ひて「渡り給へ」ともなく、その夜は独り臥し給へり。

「あやしう中空なるころかな」と思ひつつ、君たちを前に臥せ給ひて、かしこに、また、いかに思し乱らんさま思ひやり聞こえ、やすからぬ心づくしなれば、「いかなる人、かうやうなること、をかしうおぼゆるん」など、**Y** もの懲りしぬべうおぼえ給ふ。

明けぬれば、「人の見聞かむも若々しきを、『限り』とのたまひは **c** てば、さて試みむ。かしこなる人々も、**(イ)** らうたげに恋ひ聞こゆめりしを、選り残し給へる、『様あらむ』とは見ながら、思ひ棄てがたきを、ともかくもてなし侍りなむ」と、威し聞こえ給へば、「すがすがしき御心にて、この君たちをさへや、知らぬ所に率て渡し給はん」と、あやふし。

姫君を、「**(ウ)** いぎ、給へかし。見奉りにかく参り来ることとはしたなければ、常にも参り来じ。かしこにも人々のらうたきを、同じ所にてだに見奉らん」と聞こえ給ふ。まだいといはけなくをかしげにておはす、「いとあはれ」と見奉り給ひて、「母君の御教へにな叶ひ給うそ。いと心憂く、思ひとる方なき心あるは、いと悪しきわざなり」と、言ひ知ら **d** せ奉り給ふ。

(注) 1 大殿——三条殿の父(本文では「おとど」の邸宅)。

2 女御——三条殿の姉妹。入内して宮中に住むが、このとき、里下がりして実家(大殿)にいた。

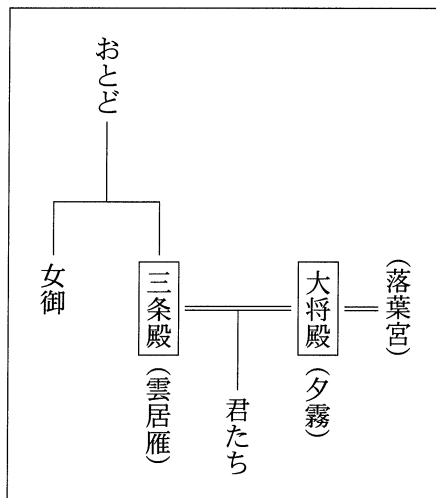
3 おとど——三条殿の父。

4 いとひききりに——ひどくせつかちで。

5 はなやい給へる人々——派手にふるまって事を荒立てなきる人たち。「はなやい」は「はなやぎ」のイ音便。

- 6 三条殿——ここでは大将殿夫妻の邸宅を指す。
- 7 君たち——大将殿と三条殿の子どもたち。
- 8 上——三条殿。
- 9 寝殿——寝殿造りの中央の建物。女御の部屋がある。
- 10 例の渡り給ふ方——三条殿が実家でいつも使っている部屋。
- 11 御達——女房たち。
- 12 中空なる——落葉宮には疎まれ、妻には家出されるといふ、身の置き所のない様。
- 13 かしこなる人々——大将殿夫妻の邸宅(三条殿)に残された年長の息子たち。

人物関係図 主要登場人物は□で囲んだ。()内は通称。



問1

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

(ア) いかさまにしてこのなめげさを見じ

21

- ① いかなる手段を用いても私はみじめな目に会うまい
- ② どうすれば私への失礼な態度を見ずにすむだろう
- ③ どうしてこの冷淡な振る舞いを見ていられよう
- ④ だましてでも夫にひどい目を見せずにおくまい
- ⑤ 何としても夫の無礼なしうちを目にするまい

(イ) らうたげに恋ひ聞こゆめりしを

22

- ① いじらしい様子でお慕い申し上げているようだったが
- ② いじらしげに恋い焦がれているらしいと聞いていたが
- ③ かわいらしげに慕う人の様子を聞いていたようだが
- ④ かわいらしいことに恋しいと申し上げていたようだが
- ⑤ かわいそうなことに恋しくお思い申し上げているようだったが

(ウ) いざ、給へかし

23

- ① まあ、あれをご覧なさいよ
- ② まあ、そこにおすわりなさいよ
- ③ まあ、あなたの好きになさいよ
- ④ さあ、こちらへおいでなさいな
- ⑤ さあ、わたしにお渡しなさいな

問2 波線部 a ～ d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

24

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----------|---|--------|---|---------|---|--------|
| ① | a | 断定の助動詞 | b | 受身の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 使役の助動詞 |
| ② | a | 形容動詞の活用語尾 | b | 受身の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 尊敬の助動詞 |
| ③ | a | 断定の助動詞 | b | 自発の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 使役の助動詞 |
| ④ | a | 形容動詞の活用語尾 | b | 自発の助動詞 | c | 動詞の活用語尾 | d | 尊敬の助動詞 |
| ⑤ | a | 断定の助動詞 | b | 自発の助動詞 | c | 動詞の活用語尾 | d | 使役の助動詞 |

問3

傍線部X『心苦し』と思す」とあるが、誰たれが、どのように思っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 三条殿が、姫君と幼い子どもたちを実家に連れてきたものの、両親の不和に動揺する子どもたちを目にして、愚かなことをしたと思っている。
- ② 三条殿が、我が子を家に置いて出てきてしまったものの、子どもたちが母を恋慕して泣いていると耳にして、すまないことをしたと思っている。
- ③ 大将殿が、三条殿にとり残されてしまった我が子の、父の姿を見つけて喜んだり母を求めて泣いたりする様子に心を痛め、かわいそうだと思っている。
- ④ 大将殿が、置き去りにされた子の、母に連れて行かれた姉妹や弟をうらやんで泣く姿を見て、我が子の扱いに差をつける三条殿をひどいと思っている。
- ⑤ 姫君たちが、父母の仲たがいをどうすることもできないまま、母三条殿の実家に連れてこられ、父のもとに残された兄弟たちを気の毒だと思っている。

問4

傍線部Y「もの懲りしぬべうおぼえ給ふ」とあるが、このときの大將殿の心情の説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

- ① 三条殿をずっと実家に居座らせるわけにもいかず、一方でおとなしく自邸に戻りそうにもないので、どうしてこんな女を良いと思ったのかと、三条殿をいまいまいしく思っている。
- ② 三条殿には出て行かれ、落葉宮は落葉宮で傷ついているだろうと想像されて、心労ばかりがたまえるため、恋のやりとりを楽しんでいると思っている人間の気が知れないと、嫌気がさしかけている。
- ③ 眠っている我が子の愛らしさに、この子を残して家を出て行った三条殿の苦悩を思いやって心が痛み、自分はずくづく恋愛には向いていないのだと悟り、自分の行動を反省している。
- ④ 落葉宮と深い仲になったものの、不思議と落葉宮と三条殿との間で心が揺れ、三条殿の乱れる心の内を思うと気持ちが落ち着かず、自分の行動を後悔して、死にそうなほど苦悩している。
- ⑤ 落葉宮を愛していても、三条殿がいる限り先が見えず、落葉宮も現状に悩んでいるかと思うと心穏やかでなく、世間の目も気になって、三条殿との生活が嫌になり、別れたいと望んでいる。

問5

本文中の会話文A、Cに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

① Aは大将殿の言葉で、三条殿の年がいのなさを責め、多くの子をなすほど深い仲なのに、少しの出来心ぐらいで実家に帰るなんてと非難している。Bは三条殿の言葉で、大将殿のお心が離れた自分は変わりようもなく、何をしようと勝手だ、子どもたちのことは後はよろしくと言っている。

② Aは大将殿の言葉で、子どもたちをほったらかして女御のもとに入り浸っている軽率さをたしなめ、子育ての苦労ぐらいで実家に帰る無責任さを非難している。Bは三条殿の言葉で、浮気者との間の子を育てるのには今は飽き飽きしており、子どもたちはそちらで世話してくださいと言いつ返している。

③ Aは三条殿の言葉で、年がいもなく恋にうつつを抜かして子どもたちのことを忘れていると大将殿をなじり、親のくせに無責任ではないかと非難している。Bは大将殿の言葉で、私の気持ちはもはやもとに戻りそうにないが、子どもたちだけは見捨てずにいてくれれば嬉しいと応じている。

④ Bは三条殿の言葉で、大将殿に愛想を尽かされた自分であるし、今さら性格を直すつもりもない、私のことはともかく、子どもたちだけは面倒を見てほしいと言っている。Cは大将殿の言葉で、三条殿の言い分に理解を示して機嫌をとりつつも、最後には、私の名誉も考えてほしいと頼んでいる。

⑤ Bは三条殿の言葉で、私に飽きたあなたのお気持ちがおもはやもとに戻るはずもなく、お好きになさればよいが、子どもたちへの責任は負っていただきたいと言っている。Cは大将殿の言葉で、穏やかなお返事ですねと皮肉をにじませつつ、このままでは、あなたの名折れになるだけだと反論している。

問6

この文章の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

28

- ① 三条殿は、心変わりしてしまった大将殿に絶望して実家に戻り、おとどと語ることで、やっと「少しもの思ひ晴るけどころ」を見つけ、もはや大将殿とは暮らせないと、このまま別れる決心をした。
- ② おとどは、三条殿のことを心配して、大将殿に「消息たびたび聞こえ」たが、大将殿は全く返事をしないので、「かたくなしう軽々しの世や」と、大将という立場にそぐわない軽薄さを不愉快に思った。
- ③ 大将殿は、三条殿の家出を知り、三条殿父娘の短気で派手な性格を考えると、「ひがひがしきこと」をしでかしかねないと驚いて、「暮らしてみづから参り給へり」と、すぐさま大殿へ迎えに行った。
- ④ 三条殿は、強気に帰宅を拒みながらも、思い切りのよい「すがすがしき御心」の大将殿ならば、ここにいる子どもたちまでも自分の手の届かない場所に連れて行ってしまいかねず、「あやふし」と危惧した。
- ⑤ 大将殿は、説得に耳を貸さない頑固な三条殿の手もとで育つことになる姫君の将来を心配して、「母君の御教へにな叶ひ給うそ」などと、せめて教訓を言い聞かせることで、父の役割を果たそうとした。